※「シマケン・コイル」の初出は、『新装版水生昆虫アルバム』（2007 年刊）の付録。以降「シマケンコイル」と称していたが、「第三者がシマケンというのはまだしも、本人が自分のことをシマケンというのは違和感がある」とのご御意見が寄せられていた。また他に、釣りの世界にも他の分野にもシマケンという方が複数いらっしゃるようで紛らわしかったりもする。中には苗字が「シマ」で御名前が「ケン」という人物までおられるとのことで、この方は何と「シマケンワールド」という展開までなさっているらしい。今回から「シマザキ・コイル」と改訂することにした。（島崎）

↑　シマザキコイル使用例。写真のシステムは DT4F ＋ツイストループ（次ページ参照）30㎝＋ 02X( 直径 0.33㎜＝ 4 号 ) のコイル ( 直線にした状態で 60㎝ ) ＋フロロカーボンリーダー 9 フィート 6X の中間部 ( 直径 0.4㎜前後の部分 ) でカットし、バット側をパーフェクションループにしてコイル側のループと接続 ( リーダー部分約 5 フィート ) ＋フロロカーボンティペット 6.5X(0.5 号 ) を 2 m ( この状態でコイルからフライまで約 3.5 m。慣れてくるとコイルから先を 5 m以上にしてもアタリを取れるとのこと。コイルに直接ティペットを接続する方法でも良く、この方がアタリがより鮮明に出る面もあるが、テーパードセクションを介してティペットに繋げる選択肢もあるという一例。

# ［シマザキ・コイル］ただ今進化中

編集部まとめ

**遊びだからトコトン工夫する**

シマザキ・コイルとは島崎さん考案のユニークなリーダーシステムの中の螺旋（らせん）状の部分を指す。そのシマザキコイルだが、現在は『新装版水生昆虫アルバム』の付録で述べられているものからは、予想もつかない領域まで進化している。何でここまでやるのか首をひねりたくなるほどだ。島崎さんによると、「遊びだからトコトン工夫する」のだという。たしかに、仕事だったらここまではやらないだろう。

昨年11月、島崎さんの釣りや独特の工夫などを撮影して小社で DVD にすることになっていたのだが、指先の状態（第88号「シマザキワールド」参照）が思わしくなく延期した。第91号の発行が遅れたのもそのことと無関係ではない。

そんな経緯もあるので、コイルだけでも今号で「シマザキコイル①」として解説していただけないかと打診してみたところ、「また新しい方法を考え出しちゃってサ、目下色々実験中なんだよ」とのこと。「解説なんかしているような状況ではない」とあっさり断られてしまった。「では次号でゼヒ」としつこく交渉中だが、かつて料理人だった島崎さんにとっては、まだ半煮えの鍋の中味を皿に盛りつけろと言われるようなものらしい。

島崎さんは昔から釣りそのものは仕事にしないことを信条としており、だからこそ、コイルに限らず周囲が呆れるほどノメリ込んでいつも楽しそうなのだろう。



Progressive **Shimazaki Coil**

↑　→　ラフでまばらなシマザキ・コイルは遠くからでも見やすく、近距離で故意に沈めて糸状のシモリ浮き状態にして使う場合も微妙な魚信を感知しやすい。フローティングライン＋コイルの他にシンキングライン＋コイル（！）のシステムも現在研究中（本文参照）。

が、正直言って編集部としては適当なところで線を引いてひとまずまとめてもらいたいです…、と泣きを入れたいところだ。

今回はとりあえず島崎さんに現状報告を語ってもらうことで次号への架け橋としたい。

（編集部）

◎

**フライ以外の釣りでも使われている**
**コイル仕掛け**

前にも述べましたが、コイル状に加工した糸または爪などで縮らせた糸を釣りの仕掛けに組み込むことは特に目新しいことではないんです。

たとえば渓流の脈釣りや和式の毛鉤釣りでも使っている人もいますし、フライの方の有名どころでは杉坂隆久さん。カッコイイ釣りをするあの隆久さんが以前から指にリーダーの一部を巻き付けてドライシェイクスプレーをシュッとやっているのは皆さん御存知のことと思います。

ヨーロッパあたりでも同様のことを考える御仁がいるようで、コイル関連の動画が数年前から次々に投稿されたりしてますね。最近では、欧州スタイルのニンフィングの現在を紹介した『Fly Rodders』誌の記事で「コイルド・サイター」とか「コイルド・